

# 意見陳述書

2023（令和5）年4月28日

氏 家 剛

- 1 私は生まれも育ちも福島です。2011年8月3日、車に入るだけの荷物を載せ、8月5日に佐賀県鳥栖市へ単身避難してきました。

故郷は福島市の北隣、福島第一原発から約60kmの位置にある桑折町。生産が盛んな桃は毎年皇室・宮家へ献上され、近年はゲンジホテルが再び田んぼを飛び交うよう地元の先輩方が水を綺麗にしてきた、自然豊かな町です。また、明治時代には日本三代銀山と呼ばれた半田山、全国屈指の養蚕地帯だった時期もあり、仙台藩伊達氏とのゆかりもあるなど歴史ある町です。

私は一度も福島を離れたことはなく、就職先も地元の大手スーパーマーケットでした。2009年の秋、県南に位置する東白川郡棚倉町へ異動、住居は西白河郡西郷村でしたが、そのどちらも故郷である桑折町と同じように田畑と山が広がる、のどかで自然豊かな町でした。

いつか色々な経験や勉強をした後に、福島が楽しい町となるような仕事をしたいという夢がありました。若者が東京などの県外に出て行ってしまふことが多い福島で、いずれ、若い人たちに向けたイベントや、若者が遊びに来たいと思ってもらえるような企画やお店をやりたいと思っていました。大好きな福島を離れるということは考えもしませんでした。

- 2 そんな中で、東日本大震災および福島第一原子力事故に遭います。この日、私の人生は変わりました。

職場で被災し避難誘導を終えるも巨大な揺れの中で、「原発は大丈夫だろうか」と言う不安がよぎりました。小さい頃からテレビではプルサーマルの安全性を謳うCMが流れ、その度父が危険な核を使うことを批判していたのを見聞きしていたからです。私自身も核を使うことに否定の立場ですが、原発に何かあっても国や東京電力が大丈夫・安全と言ってるのだから、きっと対策があって大丈夫だろうと信じました。

ですが、現実とは違いました。緊急停止棒が挿入されると知ると職場の上司の一人が「危険な状態、場合によっては爆発する」と言っていました。その予想は現実には、しかも3基が爆発。

避難区域は徐々に広がり、ニュースでは「家の中は目張りをする」「外出した時の服は袋に入れて保管する」などの対策情報が流れ、ついには降水確率のように各地の線量値がテロップで流れるようになり、普通の生活なんて無理と通告されているようなものでした。

事故後間もなくテレビでは茨城県のパセリや静岡県のお茶が汚染されたと報道され、それから数週間も経たないうちに、汚染された牛がついに福島から出荷されたなどの情報も流れます。牛の出荷元は、汚染は比較的大丈夫と言われていた棚倉町近隣地域からだを知ったのはそれから一ヶ月ほど後でした。棚倉町は、福島第一原発から約70km離れています。

職場では、原発事故後およそ一週間前後で、各市町村の各青果物、大幅に緩和された基準値すら超え汚染されたものの出荷停止・販売自粛の情報が毎日本部から届くようになり確認する日々が続いてましたが、その業務が始まり約1ヶ月ほどでしょうか、ついに故郷である桑折町の名前が出てきた時、初めてダメなのかもしれないと受け止め始めました。

私自身悩みながらも、小さなお子さんがいる同僚などには避難を促したりもしていましたが、先に九州へ避難した恩人からの「人生を大事にして欲しい」という言葉で最終的に私は避難を決断。家族や友人知人に一緒に避難しようと声をかけましたが、それは叶いませんでした。

直属の上司と店長には避難のために仕事を辞めることを6月後半に伝え了承は得ましたが、お盆までの勤務を求められた所から大きな喧嘩となりました。「親残していくなんて薄情だな」「さっさと行ってしまえ」などと言われてからは、毎日泣きながら仕事をしていました。大好きな福島を離れたくないこと、喧嘩なんてしたくなかったこと、でもそうになってしまったことが苦しくて仕方ありませんでした。最終出勤日の翌日に最後の挨拶へ向かうと喧嘩した店長から言われました。

「きっとお前の判断は正しい。」

店長も苦しんでいたことを知りました。

それから一週間だけ実家に戻りました。ここに来るのは人生最後になると覚悟して、家族への申し訳ない気持ちと、もう一度だけ避難を説得しようと思ってです。しかし、家族は残ると決めていました。

事故直後は子供である私たち兄弟を遠方へ避難させることを考えていた両親です。しかし、両親自身は当時60歳を超えており、その年齢で見知らぬ土地で0から人生を始めるのは辛い、と諦めていました。また震災当時、実家は新築中であり、その名義人の兄は責任もあり避難は考えていなかったと思います。

みんな本当に悩んでいました。声に出していないだけで、避難できるならしたい人も多くいるのだと、ですがそれぞれに色んな事情があってどうしてもそれができないのだと分かりました。なんで福島がこんな目に遭うのだろうか、もうダメなんだ、と悔しさと怒りのあまり避難前日にSNSへ投稿した私の強い言葉で傷ついた仲間とも喧嘩になってしまいました。この時、もしも福島が大丈夫になったとしても私は帰る場所をなくしてしまったのだなと覚悟し、生きることが嫌になり泣きながら必死で避難先である佐賀県鳥栖市へ向かったことを思い出します。

3 鳥栖市に避難したあと、短期雇用で勤めた会社で福島から避難をしてきたことを伝えた時、同僚から「親を残してきたの」と言われたことがありました。その人にとっては単に事実を確認しただけのつもりだったかもしれませんが、私には「親を見捨てて来た」と責められたように聞こえました。押し込めていた罪悪感が沸き上がり、その言葉が私の胸にささりました。

それから鳥栖市を離れ、いくつかの場所を転々とし、働く場所も転々となりました。先述した恩人ご家族、九州で寄り添ってくれた方達と無農薬野菜を育て福島に送るなどの活動をした時期もありましたが、無力であることを痛感し、疲れ果ててこの数年間は何も出来ず、ただ福島のみならず心の中で謝りながら生きています。

それでも、私はまだ救われてるかも知れませんが、福島・東北から来たというだけで多くの方は察してくれるのですから。同じように原発事故で高濃度の汚染地帯がいくつもできた関東圏から避難してきた方達は、支援も理解もなかなか得られないまま避難生活を続けています。

避難当初知り合った、関東から単身で避難してきた男性は、避難であることすら誰にも言えないままひっそりと生きていました。誰からも手を差し伸べられないまま。その孤独感を思うと言葉になりません。

今、私は福岡県久留米市に住み、働いています。事故から10年以上が経ち、周囲の人々が福島第一原発事故のことを忘れていっているのを感じます。東日本大震災のことをいうと理解を示すような反応をされますが、福島第一原発事故の被害のこととなると、「まだ言っているのか」、「被害者ぶっている」という空気が漂います。

でも、事故はまだ終わっていません。原発の廃炉作業は終わっていないし、避難対象地域だったところに住んでいた多くの人々が故郷に戻れないまま、原発事故で壊された地域は壊れたままで、本当の意味での打開策もないまま後回しにしているだけだと思います。

私は、この12年で3回、福島に帰省しました。福島に帰ると、知人や家族へ、どうしても後ろめたい気持ちが拭えません。原発事故は、私にとって安心できる故郷、い

つでも帰れる故郷を奪いました。

- 4 今回、私は、玄海原発の差し止め訴訟の原告になりましたが、福島第一原発事故から12年が経ち、為すべきこと・本当に改善すべきことをなさないまま再び原発を推進しようという国や電力会社に心底腹が立ち、同じ過ちを繰り返そうとする社会に危機感を覚えたからです。

玄海原発で事故が起きて、福島と同じように故郷を失う人が出ないともいうのでしょうか。それとも、事故は起こらないともいうのでしょうか。福島第一原発事故の前、国と東京電力は、原発は安全だと地域の人々に言っていました。

鳥栖市に避難してきた後、佐賀県内に原発があると聞いて玄海原発を見に行きました。その時、日本の棚田百選にも選ばれた浜野浦の棚田も見に行きました。午後の遅い時間で、棚田を夕日が照らすその風景に感動しました。

ひとたび事故が起これば、玄海の人々が受け継いできた棚田も、そこを耕して生活してきた人々の暮らしも消えていきます。その時、「想定外だった」では済まされないのです。原発は、命、健康を害することはもちろん、地域社会、その歴史を終わらせるものであり、金で解決できるものでもなければ、取り返すこともできない、かけがえのないものです。

これは玄海、佐賀県だけの問題ではありません。九州の皆さんは、東北以上に故郷を愛する方々で溢れていると感じた12年です。その九州の人々の郷土愛を踏みこむことにもなります。

それは、福島第一原発事故で、もう分かったはずですが。あんな事故があったのに、また、同じことを繰り返すのでしょうか。

福島の被害を忘れないでください。どれだけ対策を練っても事故が起きてからでは命も安全な食も暮らしも奪い取り返しがつかないのです。原発を使うことのない社会を真剣に考えてください。

以上

